

二〇一七年度

聖園女学院中学校 入学試験問題

国語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで中を開いてはいけません。
- 二、受験番号・氏名を解答用紙の定められた欄にかならず記入しなさい。
- 三、試験問題の印刷がはつきりしない場合には手をあげなさい。
- 四、解答は解答用紙に記入し解答用紙のみ提出しなさい。

三次

一、次の——線部をひらがなに直しなさい。

- (1) 石灰を水にとかす。
- (2) 室内を装飾する。
- (3) 市場に出荷する。
- (4) 双眼鏡で景色を見る。
- (5) 本屋を営む。

二、次の——線部を漢字に直しなさい。

- (1) 病院でゆけつする。
- (2) 山のしゃめんを下る。
- (3) 秘密をげんしゆする。
- (4) 花火は夏のふうぶつだ。
- (5) 目的をとげる。

三、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

いくら洗濯のすべてを機械に任せたいからといっても、洗濯した衣類を着用して汚すところまで、「全自動」にお任せしたいとは思いません。なんだか変なことを言うな、と思われるかもしれませんが。自動の機械を求めたとしても、逆にすべてが自動になってしまふことの味気なさが生まれることもあります。

「便利」というのは、ほんの少しの動作で用事がすみ、思い通りの結果に変化すること、自分が行った動作に對して得られる結果が非常に大きいことです。ボタンひとつ、かけ声ひとつ、ハンドルとアクセルを操作するだけで、何百キロも移動できる、お金をやりとりするだけで食べ物が入る、力仕事や細かい手仕事をしなくてよい……。そんなことが「便利」の魅力です。ものが変化していく過程をじっと見たり、変化の度合いをコントロールする必要はなくなります。過程がどのようなものか知らなくてもすんでしまい、たとえ知ったところで、自分の意志を生かしたり、工夫する余地を見つけるなど、自ら影響を及ぼすことができない場合も多くあります。

自動を歓迎しながらも、一方でわたしたちは頭を使って考えたり、手を使って工夫してものを作り上げることを楽しいと感じる力を持っています。

現在のわたしたちが趣味として行っていることの中には、昔の人たちが生活のための生業なりわいとして行っていたことが少なくありません。釣りやキャンプ、カヌーなどのアウトドア・レジャー、キノコ狩り、木の実拾い、日曜大工、陶芸や板金ばんきんなども生活するために必須ひつすの作業。その中から環境を整えたり道具を作る技術が生み出されました。縫い物や編み物やパッチワークは、寒さや危険から身を守る衣服を作るのに必要でした。

②「アウトドア・レジャー」ということばがあるのは、世界中でも限られた国だけだそうです。アウトドアを「レジャー」として位置づけることができるのは、あまりにも便利が進んでしまっていることを表しています。そして同時に、生活に手間をかけたがり自分で工夫したりするのは楽しいことなのだを教えてくれているようにも思います。

もつともつと便利にと「多くの自動化」を求めても、やがてそのありがたみが薄れたり、味気なさを感じることもあります。自動化して楽をしたというのも生活や未来を作っていくことのひとつですが、自動③だけじゃつまらない、と考えるのも、未来のひとつです。また、便利さをお金で買うのもひとつの選択ですが、できるだけ多くの工程を自分の手で行うこともまた、創造的で楽しい仕事です。

そのことをあらためて実感したのは、はじめて自分で味噌みそを仕込んだときでした。

それまでのわたしは、味噌といったらバックに入ってお店の棚たなにあるもので、自分で作るなど考えたことはありませんでした。味噌作りのプロセス※はわたしにとって「ブラックボックス」も同然でした。

そんな事情が変わったのは、ある年の暮れ、十年來の友人から声をかけられたことがきっかけでした。

「こんど、みんなで味噌作り講習会をやるけど、参加しない？」

ちようど、発酵食品はっせうに興味を持ち始めていたころでもあり、ぬか漬づけを作ったり、小さな瓶びんでお酒を仕込ん

だり、自家製の酵母を使ってパンを焼いたりしていたので、講習会のような場なら気軽にトライできるかもしれないという気持ちになったのです。

さて、教えてもらいながら味噌を仕込んだ感想は……？ 拍子抜けするほど単純でした。味噌の素材は、大豆、塩、米麴、麦麴です。麦麴を使わず米麴だけで仕込むこともあるそうです。手順もいたって単純です。大豆をゆでてつぶし、米麴、麦麴と塩を混ぜ、殺菌した容器に詰めます。

あとは、麹菌がせっせと働いてくれて、人間がすることと言えば、食べるだけです。余談ですが、日本の調味料は、醤油も、酢も、酒も、砂糖以外は米と塩と大豆と水だけでできているという単純明快な事実を知ったことも新たな発見でした。

⑥ 自分で作ると、今まではなんとも思わなかったことが不思議に感じられることもあります。そのひとつは、「味噌の製造年月日って、いったいなにを指しているのだろう？」ということでした。そしてその疑問は、食品に表示された「安全情報」にあまりにも依存してきた自分の生活を振り返るきっかけにもなりました。当然のことですが、わたしの味噌には、賞味期限の日付が印字されていません。自分で作っているので使用原料ははっきりわかりますが、「商品」になった食品にあるような情報はありません。安全なものを食べたいと思ったら、その判断は最終的に自分が下すしかないこと、作る過程が見え、実感がある食べ物に愛着がわくこと、おいしいもの、まずいものに対してその理由を推測することができること、食材や加工品を作っている人たちに対してありがたみがわくこと……など、自らの手で味噌を仕込むことで、ふだんの自分の食生活、食環境についていろいろと考えるようになりました。

なかでも、食べるものが安全であると確信して口に入れるのには、ことのほか「実力」がいるように思いました。買ったもの、特に加工品は、だれかが作って、だれかが安全を「保証」し、賞味期限を決めてくれます。「メーカーや検査機関、行政がきちんとやってくれているだろうから、きっと大丈夫」と漫然と思ひこむことで、もしくは何も考えずお任せ状態で受け入れてきた自分に気づいたのです。「きっと大丈夫」の「きっと」とは、ちょっと心配だけれど、大丈夫であってほしいから大丈夫ということにしちゃおう、といったところでしょうか。自分には何の根拠もないし、他の人が言うことに納得できる理由があるのかないのか、あるとすればどういふものなのか、よくわからないけど、大丈夫という希望を持っている自分を追認するだけだったのです。

食べ物に関する実力。そんな、生き延びるためにもっとも必要な能力を、わたしたちは持っていないということなのでしょう。身の回りにあるもののしくみや原理、由来を考えることなくものがうつり変わっていく。わたしたちはそんな世界に生きているのではないのでしょうか。便利に思える科学技術も、その表面だけしか見ていないのではないのでしょうか。

（佐倉統 古田ゆかり『おはようからおやすみまでの科学』より。一部改変）

（語注）※ プロセス……物事が進んでいくすじ道。

- (問一) — 線① 「『便利』の魅力」に当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 電子レンジでお弁当を温めて食べた。 (イ) 近所のお店で手作りコロケを買った。
(ウ) 荷物が重かったので家まで車で運んだ。 (エ) 海で拾ってきた貝がらでネックレスを作った。
- (問二) — 線② 「『アウトドア・レジャー』……国だけだ」とありますが、なぜですか。説明しなさい。
- (問三) — 線③ 「自動だけじゃつまらない」とありますが、それは人間にどのような力があるからですか。文中から四十字以内で探し、始めと終わりの五字を書き抜きなさい。
- (問四) — 線④ 「いたって」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 非常に (イ) 適度に (ウ) 意外に (エ) 素直に
- (問五) — 線⑤ 「くれ(る)」と意味・用法が同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 祖母がくれたのは本だった。 (イ) 姉は私をばげましてくれた。
(ウ) 日がくれたので家に帰った。 (エ) 私はピアノの練習にあげくれた。
- (問六) — 線⑥ 「自分で作る」とありますが、自分で作る経験からわかったこととして何がありますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 食品に表示されている安全情報はとてもありがたく、欠かせないものだということ。
(イ) 日本の調味料は原材料が同じであってもそれぞれの工程が異なり、複雑であるということ。
(ウ) 食品に愛着がわき、食材や加工品の作り手にも感謝の気持ちが生まれるということ。
(エ) おいしいものやまずいものに対して敏感になると、その原因がすぐに特定できるということ。
- (問七) — 線⑦ 「いったい」を用いて、主語・述語のととのった短文を作りなさい。
- (問八) — 線⑧ 「確信」と同じ構成の熟語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 再会 (イ) 登山 (ウ) 生産 (エ) 地震
- (問九) — 線⑨ 「ことのほか『実力』がいる」とありますが、だれ(何)に「実力」がいるのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) メーカー (イ) 検査機関 (ウ) 行政 (エ) 自分
- (問十) 本文の内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
(ア) 生活に手間をかけ工夫をすることによって、本当の意味の便利な社会は作られてきた。
(イ) 多くのものを自動化することによって、生活や未来をよりよく創造することができる。
(ウ) 味噌を手作りすることによって、自分の食生活や食環境を見直すようになった。
(エ) 科学技術によって、生き延びるために必要な能力を身につけなければならない。

四、次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

五月になり、いよいよ待ちに待ったその日がやって来た。

リボンが誕生してから、ちょうど半年が経ったのだ。今日は、すみれちゃんとそのお祝いをする事になっている。

片手にハコベのブーケを持ち、^①なんだか弾んだ気持ちになって、誰もいない路地をスキップしながら前に進む。地面に着地するたびに、ランドセルの中に入っている筆箱やノートや教科書が、派手な音を鳴らす。あとひとつ角を曲がれば桜並木で、家の玄関が見えてくる。リボンにもすみれちゃんにも、早く会いたい。リボン、もうすぐだからね。

心の中からメッセージを送るようなつもりで、遠くのリボンに話しかけた。

けれど、角を曲がった瞬間、幸せな期待はあとかたもなく消え去った。すみれちゃんが、靴下のまま玄関先に倒れ込んでいたのだ。

「どうしたの！」

ハコベのブーケを握ったまま、私は全速力で駆け寄った。

「すみれちゃん！」

すみれちゃんの顔が、ひどく青ざめていた。嫌な予感が、夕立みたいに一気に胸を支配する。

「リボンが、リボンがね……」

そこまで言うと、すみれちゃんは絶句して、子どものように力強く私にぎゅっと抱きついた。すみれちゃんが、私の胸の中でべそをかいている。

「どうしたの？ ねえ、すみれちゃん、リボンがどうしたの？」

すみれちゃんの丸い背中をさすりながら、なんとか状況を聞き出したかった。すみれちゃんが、弱々しい息のような声でささやく。

「わたくしも、何かお手伝いができないかと思って……」

「それで？」

その先が早く知りたい。

「かごの掃除をしようと、リボンを外に出してたんです。その時に電話が鳴って、わたくしがうっかり、部屋の入り口を開けてしまったのですから」

すみれちゃんは涙声になりながらも続けた。その時に、リボンが逃げてしまったのだろうか。でも私は内心、リボンが大げがをしたとか、それよりもっと最悪のことを想像していたから、^②少しホッとしたようなところも

あった。

「^③ごめんなさい、本当にごめんなさい。わたくし達の大切な宝物を……」

すみれちゃんは涙をぼろぼろ流しながら、私にひたすら謝った。

「大丈夫、大丈夫だよ、すみれちゃん。絶対に大丈夫だから」

^④私は優しくささやいた。

だってリボンは、まだちゃんと生きているのだ。生きていれば、またどこかで会えるかもしれない。それに、すぐに戻ってくるかもわからない。頭ではそう思うのに、すみれちゃんの涙がうつってしまい、私の目にまで、涙があふれた。悲しくなんてないはずなのに、なんだかどうしようもなく切ない気持ちだが、一歩ずつにじり寄って、私を動けなくする。

「ごめんなさい」

すみれちゃんが、そう言った時だ。桜の木から、黄色い鳥が飛び立った。

「リボン！」

私は、大声で呼んだ。

「おいで！ こっちだよ、戻っておいで」

リボンのいる方に向けて、精いっぱい腕を伸ばし、人差し指を差し出す。けれど、リボンは振り向かなかった。あつという間に、薄いピンクの夕暮れの雲にまぎれてしまう。

「リボン！」

もう一度、声を限りに叫んだ。けれど、チューしようよ、という言葉は、声にならない。

すみれちゃんが、泣いている。私の目からもまた、涙がこぼれた。リボンがあんなふうに空を羽ばたけるようになったなんて、これっぽっちも想像していなかった。

たった今大空へと飛び立ったリボンの後ろ姿は、まるで本物のリボンのようだった。美しくちよちよ結びにしたみたいに、羽翼うよくと尾翼びよくが、きれいな末広がりになっていた。

私は蠟人形ろうごみたいに固まって、そのまま空を見続けた。もしかすると、もしかすると奇跡⑤が起きるかもしれない。そう思うと、すぐには動くことができなかった。足元で、すみれちゃんもぽかんと空を見上げている。

でもやっぱり、奇跡は起きなかった。少し肌寒い風が吹き始めたので、私は覚悟を決め、喉のどの奥から声を絞り出した。

「中に入ろう」

すみれちゃんの脇の下を両手で支え、立ち上がらせる。それからすみれちゃんの手をしっかりと握りしめ、玄関までの数メートルを、手をつないだままゆっくり歩いた。

リボンが宝物だったのではない。

すみれちゃんとふたりで卵をかえしたことや、まだ目の開かない頃に餌えさをやり続けたこと、リボンとすみれちゃんと三人で一緒に過ごした時間のすべてが、私にとっては宝物だったのだ。だから、宝物が消えたわけではない。宝物⑥は、ずっとこの胸に残っている。

リボンに生えた立派な風切り羽は、大空を羽ばたくために神様が与えてくれたものだ。リボンは、空を飛ぶために生まれてきた。だからあれが、本当の姿だ。

家に入る前、手に持っていたハコベのブーケをそっと土の上に放った。もしかしたら、リボンがまた、戻ってきてくれるかもしれない。大好物のハコベを置いておけば、ここが中里家の目印になる。リボンが私の肩から首の裏を通って反対側の肩に移動する時のくすぐったい感触が、なぜだか突然甦よみがえった。墨汁ぼくじゅうをほとんと一滴、丸く落としたようなつぶらな瞳ひとみを思い出した。

私はもう一度、空を見上げた。

この空のどこかに、リボンは確かにいる。

リボンは、生きている。これから先も、生き続ける。

だから、今日はリボン⑦の門出をお祝いする日だ。リボン⑧はきつと、空のどこからか、必ず私とすみれちゃんを見守ってくれている。

だってリボン⑨は、私とすみれちゃんの魂たましいを永遠につなぐリボン⑩なのだから。

私はがんばってがんばって心を奮ふるいたたせてそう思おうとしたけれど、涙⑪を止めることはどうしてもできなかった。

(小川糸『リボン』より。一部改変)

字数制限のあるときには、句読点や記号は一字と数えなさい。

- (問一) — 線① 「なんだか弾んだ気持ちになって」とありますが、なぜですか。答えなさい。
- (問二) — 線② 「少しホッとしたようなところもあった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- (ア) リボンが家からいなくなったのではないとわかったから。
- (イ) すみれちゃんがリボンの世話をしてくれていたとわかったから。
- (ウ) リボンが死んでしまったのではないとわかったから。
- (エ) すみれちゃんが大けがをしたのではないとわかったから。
- (問三) — 線③ 「ごめんなさい、本当にごめんなさい」とありますが、すみれちゃんはなぜ謝っているのですか。十五字以内で答えなさい。
- (問四) — 線④ 「私は優しくささやいた」とありますが、ここにこめられた「私」の気持ちを説明しなさい。
- (問五) — 線⑤ 「奇跡が起きるかもしれない」とありますが、どのような奇跡ですか。答えなさい。
- (問六) — 線⑥ 「宝物」とありますが、
- (A) すみれちゃんが考えている宝物とは何ですか。ここより前の文中から四字で探し、書き抜きなさい。
- (B) 「私」が考えている宝物とは何ですか。文中から一文で探し、始めと終わりの五字を書き抜きなさい。
- (問七) — 線⑦ 「リボン」・⑧ 「リボン」・⑨ 「リボン」・⑩ 「リボン」の中で内容の異なるものを一つ探し、番号で答えなさい。
- (問八) — 線⑪ 「涙を……できなかつた」とありますが、ここでの「私」の気持ちを二十字以内で答えなさい。

問題は、ここで終わります。